

太平洋イカ類漁場調査

(開運丸によるアカイカ漁場調査・東奥丸によるイカ類漁場調査)

大川 光 則・仲 村 俊 毅・菊 谷 尚 久

発 表 誌 名

イカ釣漁場開発調査資料XIV(平成元年4月)及び昭和63年度外洋性イカ(スルメイカ・アカイカ)に関する生物測定・標識放流・海洋観測基礎資料集。

抄 録

昭和63年6～11月の期間において、試験船開運丸(調査海域 $39^{\circ}-05'N \sim 42^{\circ}-31'N$ 、 $141^{\circ}-30'E \sim 152^{\circ}-09'E$)及び、東奥丸($38^{\circ}-41'N \sim 41^{\circ}-31'N$ 、 $141^{\circ}-30'E \sim 146^{\circ}-50'E$)によって、スルメイカ、アカイカ等の漁場環境、分布状況等についての調査を実施した。

1. 漁 場 環 境

春先の親潮第2分枝の顕著な張り出し及び夏季から秋季にかけての親潮第1分枝の張り出しの影響で、近海の北上暖水は南偏する傾向にあった。しかしながら、沖合の北上暖水は北偏しており、8月に形成され三陸沖暖水塊は沖合からの暖水の補給を受けて発達していた。

2. イカ類の分布

(1) スルメイカ

両試験船の総漁獲尾数は383尾で前年を下回り、高密度の漁場形成はみられなかった。

(2) アカイカ

延64回の操業で、37,486尾を釣獲した。これは前年を大きく下回っており、漁場は $145^{\circ}E$ 以西の三陸沖暖水塊周辺に形成されていたが、沖合域の漁場形成はみられなかった。

3. 水揚量(釣による)

(1) スルメイカ

氷蔵船の水揚量は八戸港で922トン(対前年比48%増)、大畑港では841トン(対前年比48%)となっており、これは出港隻数の増減によると考えられる。

(2) アカイカ

氷蔵船の八戸港への水揚量は648トン、凍結船で768トンとなっており、依然として低調な水準である。